

臨床倫理メデイエーション

国立大学法人山形大学医学部 准教授 中西 淑美

84 ドイツ児童文学『モモ』の現代的意義

はじめに

ミヒヤエル・エンデによる長編童話『モモ』は、1973年に発表され、翌年にはドイツ児童文学賞を受賞した傑作である^①。この物語は、現代社会の枠組みから外れた不思議な少女モモが、時間泥棒に奪われた現代人の時間を取り戻す冒険ファンタジーとして描かれている。その核心には、人間本来の生き方を忘れ、時間に追われる現代人への鋭い警鐘が込められており、児童文学という範疇を超えて大人も深く楽しめる内容を持つ。『モモ』は、想像力や自己探求の重要性、そして現代社会への批判的な視点を含んでおり、発表から半

世紀近く経った今もなお、多くの人々に影響を与え続けている。

『モモ』の最も重要な意義は、現代社会への鋭い批判と警鐘にある。本稿では、この物語から、現代社会における時間のあり方、消費社会の問題、人間性の喪失といったことについて考えてみることにする。

1. 『モモ』の物語構造と

主要テーマの深層

2024年に、『モモ』の絵本版が出版された。その冒頭は、「大きいけれど、とてもありふれた秘密があります。みんなに関係が

あり、誰でもその秘密を知っています。でも、それについて考える人はとても少ないのです……。」と始まる（文献：『モモ（絵本版）』著 ミヒヤエル・エンデ、絵 シモーナ・チエツカレツリ、訳 松永美穂、光文社、2024）。さて、秘密とは何か。

(1) あらすじと主要登場人物の役割

物語は、都会の片隅にある円形劇場の廃墟に住み着いた、身寄りのない不思議な少女モモを中心に展開する。モモは「人の話を本当聞くこと」ができるという特別な才能を持ち、そのおかげで街の人々や子供たちから深く信頼されていた。彼女は、人々の悩みや争いを解決し、子供たちの遊びをより一層楽しなものに変える力を持っていた。モモと特に親しかったのは、無口で物事をじっくり考える道路掃除夫のベッポと、お調子者で物語を語るのが得意な観光ガイドのジジであった。ベッポの「次の一步のことだけ、次の一呼吸のことだけ考える」という哲学は、物語の重要なメッセージの一つである。

しかし、ある日、町に「灰色の男たち」が

現れてから、全てが劇的に変化する。彼らは「時間貯蓄銀行の外交員」と名乗り、人々に時間を「節約」させ、その時間を巧妙に盗むことで自らの存在を維持していた。時間を奪われた人々は、せかせかと生活するようになり、人生を楽しむことを忘れ、心が貧しく荒廃していく。モモと子供たちだけがこの異変に気付き、灰色の男たちに立ち向かうことを決意する。モモは、時間と生命の源である「マイスター・ホラ」と、30分先の未来を予知できる不思議な亀の「カシオペア」の助けを得て、時間泥棒たちとの壮絶な戦いに挑み、最終的に人々に失われた時間を取り戻させることに成功する。

(2) 「時間」の多義性と哲学的側面

『モモ』の物語は、「大きいけれど、とてもありふれた秘密があります。みんなに関係があり、誰でもその秘密を知っています」「その秘密とは、時間です」「なぜなら、時間とは、いのちだからです」という哲学的な序文で始まる。この作品において「時間」は、単なる物理的な経過や時計で測定される無機質

な単位ではなく、「生きることそのもの」として捉えられている。人間が「心」で時間を感じ取り、その時間を充実させることで初めて、その時間は「生きた時間」となるのである。物語は、時間を節約し、無駄をなくそうとする行為が、実際には心の中を貧しくし、人間が本来持つ「生きる」という本質的な意味を奪う行為であると強く警告している。灰色の男たちは、人々が「成功すること、ひとかどのものになること、たくさんものを手に入れること」を人生で最も大切だと信じ込ませ、そのために時間を節約するよう誘導する。

しかし、これは物語の登場人物であるジジが自身の経験から語った「人生でいちばん危険なことは、叶えられるはずのない夢が、叶えられてしまうこと」という言葉に象徴されるように、人間を真の幸福から遠ざけ、精神的な荒廃へと導く危険な道であることに展開している。

ここに、「時間」の多義性と、人間の幸福という哲学的な側面を読者に示唆していく。「時間とはいのちである」という核心的メッセージが、鋭く描かれている。

(3) 主観的時間と客観的時間の対立

『モモ』の作品における時間の概念は、哲学的な「主観的時間」と「客観的時間」の対立として深く考察できる。本稿でも過去に書いた、クロノスとカイロスの時間にも共通する時間の多元的な視点である^②。

客観的時間とは、時計やカレンダーによって計測される普遍的で無機質な時間であり、灰色の男たちが人々に強いる「効率化」や「節約」の対象となる。彼らは時間を秒単位で計算し、人生のあらゆる活動から「無駄」を排除しようと試みる。

これに対し、主観的時間は、個人の「心」によって感じられ、その質的な体験によって無限の深まりを持つ「生きられた時間」である。同じ1時間でも、楽しく充実した時間は一瞬のように感じられ、退屈な時間は永遠のように感じられるという人間の感覚が、この主観的時間の性質をよく表している。亀のカシオペアが体現する「ゆっくり急げ」という格言は、焦燥感に駆られる現代社会において、心穏やかに一步一步着実に進むことの重要性を示唆している。マイスター・ホラは、

人間が自分の時間をどう使うかは自分で決める責任があり、時間を盗まれないように自ら守ることの重要性を強調している。

(4)「聴く力」と人間性の回復

モモの最も特異で重要な才能は「ほんとうに聞く」ことである。モモが話を聞くと、不思議なことに相手の悩みが解決したり、愚かな人にもまともな考えが浮かんだりする。この能力は、モモが何かを言ったり質問したりするのではなく、モモに聴いてもらい、自分を「からにすること」で、相手を受け入れる「空席」を作り出すからだと理解されている。

この「聴く力」は、単なる受動的な傾聴を超え、相手の「心」に深く寄り添い、彼らが本来持っている内なる声や想像力、そして自己解決能力を最大限に引き出す能動的なプロセスである。灰色の男たちによって時間が奪われ、心が荒廃した人々が失った「楽しむこと、夢中になること、夢見ること」といった「純粋な人間の欲求」を取り戻すための鍵となる。物語の後半で、モモの「聴く力」はマイスター・ホラの「時間＝音楽」という時間

論と結びつき、彼女が「時間の花」そのものとなることで、人々に充実した時間を取り戻させる「救済者」としての資質を完成させる。

筆者の説く「平和と対話」、「協働意思決定の対話」では、このモモの聴く力をとても重要視している。医療メデイエーションという対話概念を構築した草創期より、ミヒヤエル・エンデの『モモ』は人と人をつなぐための哲学的力である「聴くこととは何か」を思索させてきた。ミヒヤエル・エンデは、ある対談の冒頭で、こんな言葉を発している。

「経験というものは、なにか他のことに役立つから重要なのではなくて、単に存在しているというだけで、重要なのです」⁽³⁾。「存在」と「聴く力」は主観と客観、関係性を回復する力を持つ。

モモの「聴く力」が持つ「客観性」は、現代社会が軽視しがちな「主観的」で「非効率な」人間的交流の中に、実は社会変革を可能にする「客観的」な力が潜んでいることを示唆している。

「時間を感じる」行為は、「個々人の人間的感性の働き」であり、純粋な理論的・因果

的測定では達成できないと考察する⁽⁴⁾。瀬戸明は、現代社会で「客観性」が「真実」とされ「主観性」が「妄想」と見なされる傾向を指摘し、モモが「奇妙な少女」と見なされることの皮肉を述べる⁽⁵⁾。

しかし、モモの「聴く力」は、子安美知子が言う「私の中の客観性」であり、「忍耐 (Geduld)」に裏打ちされた「客観性」である⁽⁶⁾。つまり、聴くことは、「Geduld＝忍耐を通じて獲得される、普遍性を持った内面的な認識」で、精神科学という内面的な探求を重視するものである。

モモは物語の後半で「主観的時間」を「客観的時間」に変容させるプロセス（一年間の眠り）を経て、「救済者」としての資質を完成させる。このプロセスは、単なる主観的感情に留まらず、より普遍的な「客観性」を獲得することで、時間泥棒の支配する「客観的な」世界に介入し、変革する力を得ることを示唆している。

このように、モモは個人の内面に深く寄り添うことで、失われた人間性を回復させると同時に、その回復した人間性を社会全体に波

及させる触媒となる。これは、単なる共感や癒しを超え、社会の病理を診断し、治療する「医療的」な役割を担っているとも解釈できる。

(5) 「灰色の男たち」の象徴性…効率主義と消費社会の擬人化

『モモ』の物語の中で、灰色の男たちは、頭のでっぺんから足の先まで灰色で、灰色の葉巻をくゆらせ、灰色の書類かばんを抱えているという、画一的で無機質な外見を持つ。彼らは「時間貯蓄銀行の外交員」と名乗り、言葉巧みに人々に時間を節約させ、その時間を盗むことで生きている。彼らの目的は、人間から時間を奪い、それを凍結・貯蔵し、葉巻として消費することである。

灰色の男たちは、現代社会における「効率化」「生産性向上」「無駄の排除」といった価値観を極端に体現している。彼らの支配下では、仕事は生産性向上が掲げられ、頭を使わない定型業務が増え、町並みは標準化され、人々の生活は日ごとに画一的になり、冷たく、貧しくなっていく。これは、物質的な豊かさ

の追求が、いかに人間の精神を荒廃させ、心の豊かさを奪うかという、エンデの鋭い社会批判を寓話的に示している。

灰色の男たちは、人間から時間を奪うことで生きたる「時間泥棒」であると同時に、人々の「心」から時間を感じる能力を奪う「感覚泥棒」であるとも解釈される。彼らの葉巻の煙は、人間から奪われた「死んだ時間」でできており、それが広がることで人々は無感動、憂鬱、無関心、愛情の喪失といった症状に苦しむ。彼らの行動は、現代社会における「成功」「金儲け」「出世」といった物質的価値観の追求が、いかに人間の精神を荒廃させるかを寓話的に示している。

「灰色の男たち」が象徴する「時間」の搾取構造は多層的である。彼らは物理的な時間を盗むだけでなく、人々の「心」から時間を感じる能力、すなわち「生きる意味」を奪う。彼らは「時間貯蓄銀行」という形で、人々が自発的に時間を「節約」し、「預ける」ように仕向ける。

これは単なる強奪ではなく、人々の内面的な価値観の変容を伴う巧妙な搾取である。灰

色の男たちは、人々が「成功すること、ひとかどのものになること、たくさんものを手に入れること」を人生で最も大切だと説き、これは現代の資本主義社会における「成功の論理」や「利益追求」のメカニズムと酷似している。彼らは時間を秒単位で計算し、無駄を排除するよう促す。

この「時間節約」は、一見すると「将来の豊かな生活」のためと称されるが、実際には人々の生活を画一化し、冷たく、貧しいものに変える。子供たちの遊びからも想像力が奪われ、彼らが「小さな時間貯蓄家」となる描写は、単なる時間の物理的喪失ではなく、時間を通じて人間性（想像力、感情、共感、遊び）が失われるプロセスを示唆している。したがって、灰色の男たちは、現代社会の「効率至上主義」と「消費主義」が、人間の内面的な豊かさや「生きる意味」をいかに巧妙に、そして自発的に奪い去るかを示す多層的なメタファーなのである。彼らの「時間貯蓄銀行」は、資本主義経済における「利子」や「投資」の概念を風刺しており、人々が「時間＝お金」という図式に囚われることで、真の人間の価

値を見失うという、より深い搾取の構造を浮き彫りにしている。これは、単に時間を奪うだけでなく、時間に対する人々の意識そのものを「商品化」し、その本質的な価値を歪める「意識の産業化」という批判的視点を含んでいる。

2. 歴史社会的背景と フランクフルト学派

(1) 歴史的背景―時間、消費、そして人間性の探求

『モモ』が発表された1973年は、西ドイツを含む世界経済が大きな転換期を迎えていた時代である。1960年代後半から高度経済成長を続けていた日本と同様に、西ドイツ経済も1968―69年にはまれに見る高成長を達成したが、半面では強いインフレ圧力と巨額の貿易黒字というジレンマに悩まされていた。

1973年の第一次石油危機（オイルショック）は、原油価格の急騰を引き起こし、世界的に「狂乱物価」と呼ばれる深刻なイン

フレを招いた。西ドイツでは1973年に消費者物価指数が7・1%上昇し、1974年には6・9%に達するなど、高いインフレ率を記録した⁽⁷⁾。

この時期は、物質的な豊かさの追求の裏で、使い捨て消費を見直し、心の豊かさを求める傾向が消費者の意識の中に見え始めた時期でもある。過剰包装や合成洗剤の追放運動、PCB汚染問題など、環境への関心が高まり、コンシューマリズム（売り手との関係で買手の権利と力の強化を求める社会運動）が台頭・進展した。労働市場においては、1960年代から70年代初頭にかけては失業率が約1%と非常に低い「完全雇用」に近い状態が続いていたが、1973―75年頃から失業率が約4%に上昇し、その後も高止まりする構造的変化が見られた。この背景には、高度経済成長の鈍化と、労働力の供給不足や石炭・鉄鋼業の不振といった産業構造の変化があった⁽⁸⁾。

『モモ』は、1970年代の西ドイツが経験した経済の転換期（高度成長の終焉、石油危機、インフレ）と、それに伴う社会意識の

変化（消費主義への批判、環境・消費者運動心の豊かさへの希求）を複合的に反映している。石油危機は、資源の有限性と経済成長の限界を浮き彫りにし、それまでの「無尽蔵な成長」という幻想を打ち砕いた。

これにより、人々は「時間」だけでなく「資源」の「節約」や「効率化」を強く意識するようになった。同時に、消費社会の進展は、より多くの「モノ」を手に入れるために「時間を犠牲にする」というパラドックスを生んだ。環境運動の高まりは、物質的豊かさの追求がもたらす負の側面（公害、使い捨て）への反省を促し、「心の豊かさ」への回帰を求める動きと連動した。灰色の男たちが時間を奪うことで人々が「怒りっぽく、落ち着きのない人」になり、「生活は日ごとに画一的になり、冷たくなり、貧しくなっていた」という描写は、経済的な不安定さや効率化の追求が、人々の精神的・社会的な「貧困」を引き起こすという、より深い因果関係を示唆している。これは単なる経済現象ではなく、社会全体の「人間性」の変容として捉えられている。したがって、作品中の「時間泥棒」に

よって、単に資本主義的効率主義を批判するだけでなく、有限な資源と無限の欲望の間で揺れ動く現代社会の根本的な矛盾、そしてそれが人々の生活と精神に与える負の影響を予見的に描いている。

1970年代は、コンピュータや情報技術が社会に浸透し始めた黎明期となった。

時間はより細分化され、効率的な情報処理が求められるようになった。エンデは、こうしたテクノロジの進歩がもたらす「時間の加速」と「人間関係の希薄化」をいち早く察知し、警鐘を鳴らしたと言える。『モモ』は、デジタル化が進む現代においても、そのメッセージが色褪せない普遍性を持っているといえよう。

これらの歴史的な背景や状況を観るにつけ、『モモ』は経済的指標の背後にある、目に見えない「生活の質」の低下への警鐘であり、エンデが単なる児童文学作家ではなく、鋭い社会分析者であったことを示している。

(2) フランクフルト学派の批判理論との関連性

フランクフルト学派は、アドルノやホルク

ハイマーらによって展開された社会哲学の理論であり、近代性や資本主義社会の病理を批判し、社会の解放を追求した。彼らはマルクス主義哲学を再解釈し、フロイトの精神分析学を取り入れ、文化が社会形成に果たす役割を重視した。このフランクフルト学派の批判理論とミヒャエル・エンデの思想には関連性が見受けられ、『モモ』における「時間」の概念に対する批判は、フランクフルト学派の「批判理論」の視点と多くの点で合致する。批判理論は、既存の社会に内面化され常識となった概念を疑い、その内面化の構造を明らかにすることを目指している⁽⁹⁾。

『モモ』において人々が「時間＝お金」という支配的なイデオロギーに無自覚に囚われ、時間を節約することが「良いこと」だと信じ込む構造は、批判理論が暴き出す「支配的イデオロギー」の典型例である⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾。灰色の男たちが人々の時間を奪い、人生を画一化する描写は、フランクフルト学派が批判した「理性の道具化」や「大衆文化の画一化」といったテーマと深く共鳴すると考えられる。

まとめ

・時間に対する哲学的問いかけとして、エンデは、「時間とは人生そのものである」というメッセージを通して、単なる物理的な時間ではなく、質的な時間、つまり「充実した時間」の重要性を訴えかけた。

・消費社会・資本主義への批判として、エンデは、資本主義社会がもたらす際限のない欲望と消費のサイクルを寓話的に描き、その虚しさを明らかにした。

・人間性の回復として、エンデは、現代社会で失われつつある、他者との真の対話や共感、そして「ゆつくりと生きること」の価値を再評価し、人間性の回復の道を提示した。

おわりに

『モモ』は、単なる児童文学にとどまらず、現代社会の抱える根本的な問題を見事に寓話化した作品である。高度経済成長の終焉、環境問題、情報化社会の到来といった1970

年代の社会的背景の中で、「時間とは何か」「人間とは何か」という普遍的な問いを投げかけ、多くの人々に深い示唆を与え続けているのである。

文

参考・引用文献

- (1) ミヒヤエル・エンデ著(訳) 大島かおり『モモ』、岩波書店、432頁、(2005/6/16)
- (2) 中西淑美・「臨床倫理メデイエーション」
(31) 身近な人の生と死にある「時間」と倫理」、『文化連情報』2019年3月号、No.492・34―38頁
- (3) 詳細は、ドイツの作家ミヒヤエル・エンデと社会彫刻家ヨーゼフ・ボイスによる1985年に行われた対談記録。ミヒヤエル・エンデ、ヨーゼフ・ボイス著、丘沢静也訳、『芸術と政治をめぐる対話』岩波書店、1992年を参照。 <https://casabrutts.com/categories/culture/400187> (アクセス2025年8月1日)
- (4) 【コラム115】時間の感じ方はなぜ人によって違うのか?―行動経済学で解き明かす―
感時間 (アクセス2025年8月1日) <https://behavioral-economics.hatenablog.com/entry/2025/06/29/090727>
- (5) 瀬戸明:『ミヒヤエル・エンデの文学について3』、研究紀要『Kunitachi College of Music journal/国立音楽大学紀要編集委員会編(27)』、107―119頁、1992、立川: 国立音楽大学紀要編集委員会、<https://cir.nii.ac.jp/crid/152029085067223936> (アクセス2025年4月8日)
- (6) 子安美知子著『私とシュタイナー教育: いま「学校」が失ったもの』、学陽書房、203頁、1984 (子安氏はルドルフ・シュタイナーの思想(精神科学)を深く研究し、自身の娘をドイツのシュタイナー学校に通わせた経験をもとに、その教育理念や実践について綴ったもので、シュタイナー教育の根底には、「内面的な認識」を育むための教育観があると述べている)
- (7) 日本銀行調査統計局編者:「西ドイツ経済の成長鈍化とその背景―社会的市場経済原理の新展開」、『日本銀行「調査月報」』第18巻 第12号、日本銀行調査統計局、48―63頁、1967年12月
- (8) 経済企画庁編者:「国際交流の高度化と1970年代の課題」、年次世界経済報告 昭和44年度参考資料、経済企画庁刊行、1969年(昭和44年) 12月
- (9) 【フランクフルト学派とは】批判理論からオススメ本までわかりやすく解説: (アクセス2025年8月1日) <https://liberal-arts-guide.com/frankfurt-school/>
- (10) 近藤悟:『モモ』における現代批判について」人文論究 51(4)、2011―213、2002、西宮: 関西学院大学人文学会
- (11) レファレンス協同データベース: さいたま市立中央図書館 (2210012) 管理番号中央―1100298 (アクセス2025年8月1日) https://crd.ndl.go.jp/reference/entry/index.php?id=1000099025&page=ref_view